



第47回日本小児感染症学会総会・学術集会

ランチオンセミナー15

小児呼吸器感染症ガイドライン に基づく診断と治療

— 迅速診断の将来展望 —

日時

2015年11月1日(日) 12:10~13:00

会場

F会場(ホテル福島グリーンパレス2階)

〒960-8068 福島県福島市太田町13-53

座長

札幌医科大学医学部 小児科学講座 教授

堤 裕幸 先生

演者

川崎医科大学 小児科学講座 主任教授

尾内 一信 先生

整理券は11月1日(日)朝7:30より配布致します。

配布場所：ホテル福島グリーンパレスメインロビー(総合受付脇)

「小児呼吸器感染症ガイドラインに基づく診断と治療」 — 迅速診断の将来展望 —

尾内 一信

川崎医科大学 小児科学講座 主任教授

近年、小児科領域においても病原微生物の薬剤耐性化が問題となっている。このような状況で、小児科医が耐性菌を増やさないで最大限の効果を得るには、抗菌薬の適正使用が重要である。小児感染症においても抗菌薬の適正使用には、正確な病型、病原診断が基本である。正確な病原診断に迅速診断キットは大きく貢献している。A群β溶血性連鎖球菌、マイコプラズマ、インフルエンザなどの迅速診断ができれば、それぞれ迅速に最も有効な抗微生物薬を選択できる。ただ臨床家は、迅速診断法の感度と特異度を常に理解しながら、検査結果の意味を理解する必要がある。現在迅速診断法で最も多く利用されているイムノクロマト法の感度は、通常80~90%であるため、10~20%の見逃しがあることを常に意識する必要がある。また、特異度は流行状況によって大きく変化するが、特異度についても常に理解しておく必要がある。今後、さらに感度、特異度の良い迅速診断法、また同時に複数の検査結果が得られるマルチプレックス迅速診断法が開発されることが期待される。また、臨床現場では百日咳、肺炎クラミジア、レジオネラ症、クロストリジウム - ディフィシルなどの迅速診断法の開発が望まれている。本講演では、ガイドラインに基づいた抗菌薬の適正使用の基本的事項を説明しながら、迅速診断法のトピックスを概説したい。